

本稿で当コラムの担当は最後となる。手足らずで誤解される箇所も多々、恥じ入るばかりだが、美術界

(画廊業)の立場から本音を吐露したつもりだ。2007年に開館した県立博物館・美術館のあり方、琉球の歩んだ歴史と美術、沖縄の若手美術家の話題などに言及してきた。自身の画廊企画においては、美術と社会の関係性を探りつつ、制作する側(美術家)と受容する側(観客)がテーマを共有し、美術のチカラによって覚醒と思索を深める空間(場)が創出できればと願った。

県立の美術館が開館5年



## おきなわ美術コラム

# 視線

上原 誠勇

目を迎えようとし、運営にも順調なリズムが出てきたかに思える。その一方で、以前活発に活動をしていたベテラン作家たちの個展が少なくなつた。作品が美術館に収蔵され、作家たちにある種の達成感が宿つたのか。また、ある作家においては美術館の企画趣旨の枠外も一因としてあるか。美術館活動とともに学芸員の調査研究が進むと、必然的に価値体系化が発生する。体系の外にある美術家はあゝ種の「弊害と疎外」のような感覚に陥るであろう。しかし、美術表現の領域は作家の思想や感性はもとより、場の状況と時間が加わり、広く立体的だ。動きだして間もない美術館の体系化は物故作家中心であり、一断面にすぎない。グローバルリズムの終焉しゅうげん、ポストモダンの終焉と多様

# 琉球美術独自の文脈を

性、同時代性を視野に入れば、もっと立体的な考察と、現役のベテラン、若手作家を取り込んだ企画が望まれる。

この島(琉球列島)の抱え込んだ独特な歴史や状況を想えばこそ、中央(東京)文脈のフィルターをはずし、独自の「琉球・沖縄の美術」文脈があつてもよい。そうすることで、この列島の地下水脈で流れ続ける「何か」と「未来像」に触れることが可能かもしれない。沖縄コンテンツポラリィを出発点に、等身大の自画像(オキナワンアート)を語り始めたい。近い将来に国際的な美術展(沖縄トリエンナーレ)が開かれることを期待したい。

最後に、昨年12月28日未明の沖縄防衛局による県庁守衛室への環境アセス書類投げ込み(闇討ち)は、怒

りの感情を越えて、深く尊厳を踏みこじる歴史的事件であつた。さらに防衛局の選挙運動への関与事件。ヤマトと琉球の構図「差別と侮蔑」がますます露わになつた。これから一体、このような見下した眼差しから、沖縄人はどのような英知をしほって平等の関係を構築していくのだろうか。当日、緊迫した空気が漂う県庁廊下で、私は抗議する市民に交じつて啞然としていた。美術家はいないか廊下を歩き回つた。集団の向こうに若手の女性美術家Yさんの姿があつた。一人で懸命にカメラを回す彼女は救いの女神にも思えた。年明けに彼女はロンドンでの個展のため旅立つた。沖縄美術界の「進化」「発展」を願いたい。「期待」と「希望」をこめて。

(画廊沖縄代表)